

本邦における腸管型ペーチェット病、単純性潰瘍に対する外科治療の現況調査 多施設共同研究

研究分担者 小金井一隆 横浜市立市民病院炎症性腸疾患科 科長

研究要旨：腸管型ペーチェット病（単純性潰瘍を含む）に対する外科治療の本邦における現況には不明な点が多い。本研究は本症に対する外科治療の適応、手術術式、吻合法、再発、再手術率などから外科治療の現況と問題点を明らかにすることを目的とする多施設共同研究である。現在までに、全国 10 施設で倫理委員会の承諾を受け、9 施設から 84 症例のデータが集められている。今後、数施設から追加症例が集積される予定で、解析を行う予定である。

共同研究者

内野 基（兵庫医科大学炎症性腸疾患講座）
杉田 昭（横浜市立市民病院炎症性腸疾患センター）
二見喜太郎（福岡大学筑紫病院外科）
根津理一郎（西宮市立中央病院外科）
藤井久男（吉田病院消化器内視鏡・IBD センター）
舟山裕士（仙台赤十字病院外科）
畑 啓介（東京大学大腸肛門外科）
福島浩平（東北大学分子病態外科）
板橋道朗（東京女子医大第 2 外科）
篠崎 大（東京大学医科学研究所病院腫瘍外科）
池内浩基（兵庫医科大学炎症性腸疾患講座）
荒木俊光（三重大学消化管小児外科）
高橋賢一（東北労災病院大腸肛門病センター）
水島恒和（大阪大学消化器外科）
植田 剛（奈良県立医大消化器・総合外科）
亀山仁史（新潟大学消化器・一般外科）
久松理一（杏林大学第三内科）

B. 研究方法

各共同研究施設において、腸管型ペーチェット病（疑い例を含む）単純性潰瘍の手術例について、過去の診療録から臨床学的項目について調査する。主な調査項目は、該当する診断項目とその診断時期、ペーチェット病の病型、術前診断、術前の治療内容、BMI、病変の分布、手術適応、術式、吻合法、切除標本の肉眼的、組織学的病理所見、術後合併症、術後治療、再発の有無とその時期、再発部位、再手術の有無とその適応、および術式などである。これらについて、全手術について調査し、用紙（昨年度報告）に記入する。

各項目を集計し、手術例の再発率、再手術率とそれらに關与する因子を解析する。

（倫理面への配慮）

共同研究施設において倫理委員会の承認を受けたのちに実施する。

A. 研究目的

本邦における腸管型ペーチェット病、単純性潰瘍に対する外科治療の適応、手術術式、再発、再手術率などを求め、外科治療の現況と問題点を明らかにしようとするものである。

C. 研究結果

2018 年 1 月 18 日現在、全国 10 施設において倫理委員会の許可を受け、9 施設が症例を登録し、84 症例のデータが集まっている（表 1）。

D. 考察

予備調査で全国 13 施設から 96 症例が集積可能との結果であり、残り 3 施設からの症例を集積する予定である。

本アンケート調査で、本邦における腸管型ベーチェット病に対する外科治療の現況が明らかになり、本症に対する治療方針の決定に有用と考えられる。

一方で、今後、腸管型ベーチェットの内科治療が変化する可能性もあり、早期に現況を分析する予定である。

E. 結論

現況での腸管型ベーチェット病に対する外科治療の役割が明らかとなる。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む)

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

表1 腸管ペーチェット病、単純性潰瘍の手術症例の集積状況

施設名	症例数
兵庫医科大学	21
横浜市立大学市民総合医療センター	18
福岡大学筑紫病院	12
東北大学	6
東京大学	4
大阪大学	3
東北労災病院	2
東京大学医科学研究所病院	1
横浜市立市民病院	17
合計	84